

小学校2年国語科

「かわさきさんのかわりに，物語のつづきを書こう！」

教材：わにのおじいさんのたからもの（教出2年上）（全13時間）

授業者 森 紗織

実践の概要

本実践は、2年生の子供たちが、見通しをもって学習を進めることができるようにすること、単元の最後まで意欲的に学ぶことができるようにすること、書かれていることを基に想像しながら読む力を育て、表現することの楽しさを味わわせることを目指した実践です。そこで、まずは「学びのゴールとなる学習活動」を「3年生を対象とした物語の続きの発表会」としました。これは、作者である「かわさきさんのかわりに」という設定で、物語の続きを書いていき、その作品の出来の検証として、3年生に発表会を開く活動です。3年生は、昨年同単元で「続きを書く」という学習をしており、その学習経験から2年生が書いた作品の出来を検証することができます、身近な存在でありながらも緊張感をもって接する上級生ということで、より効果的に相手意識を高めることができる対象と考えました。この学びのゴールとなる活動を支えるのが、3年生も納得してくれるような「続き」を書くために、友達と交流しながら自分の考えの立場を明確にし、「物語の続き方メモ」を完成させる学習です。以下、実践について詳しく述べていきます。



「物語の続き方メモ」を完成させるため友だちと交流する場面

授業のねらいと展開

本実践のねらいは、「わにのおじいさんのたからもの」の続きを作者のかわりに書くことで、場面の様子について登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むことです。続きを書くために本文から必要な事柄を集め、友達と協力しながら展開を考えていきます。このねらいを達成するための教材文「わにのおじいさんのたからもの」は、登場人物である「おにの子」と「わにのおじいさん」の「たからもの」に対する捉えの違いが明らかになったところで終わり、その後の展開に読み手の想像が広がりやすい物語です。この教材の学習を通して、書かれていることを基に想像する活動や、挿絵から読み取れることを交流するなど、多様な言語活動を生み出すことができると考えました。この「わにのおじいさんのたからもの」の続きを考え、3年生を対象とした発表会を開くという「ゴールとなる学習活動」を設定した学びのプロセスにおいて、見通しを持って学ぶことにつながっていくよう、単元を通して以下のような支援をしていきます。

視点1 学びの文脈

作者のかわりに本文の続きを書こう

- 学びのゴールとなる学習活動に出会う

場面の中心となる出来事, 登場人物についてまとめよう

- ゴールの学習活動を行うために教材文そのものを読む。

発表会に向けて, 作品の続きを書いたり, 説明を考えたりしよう

- 学びのゴールとなる学習活動を行う

学びの連続性, 必要性, 関連性を自覚しながら学ぶ

本実践における「学びの文脈」のイメージ

前述の通り国語科の実践では、「学びのゴールとなる学習活動」を単元の中に位置付けています。

単元開始期では、「かわさきさんになりきって続きを書こう。」という課題を設定しました。きっかけとして、ある2年生が残した「わにのおじいさんのたからもの」の読書感想メモ提示しました。メモには「物語の終わり方がすっきりしないため、どうなったのかとても気になる。どうしても続きを読みたい。どんな続きになるのか。」と、書かれていました。そのメモを見た子供たちが、自分たちも作品を読み、その読書感想メモに共感している場面で、物語の続きを書くことを教師が提案しました。子供たちの読み手としての姿勢がどちらかという受け身だったものから、書き手として能動的な姿勢へと一気に変換するよう仕向けました。そうすることで子供たちには、作者のかわりに書くために、作者はこの物語においてどのように登場人物を設定し、どのような様子の場面を描いているのか知る必要感が生まれます。

単元展開期①は、場面の中心となる出来事、登場人物についてまとめる学習を行いました。子供は、物語の続きを書くためにという目的をもって学んでいますが、この学習を通して、資質・能力の「場面の様子に注意しながら、登場人物の性格や行動について、書かれていることを基に、想像しながら読む」「文章の中の大事な言葉や文を見付ける」を身に付けていくことができると考えました。

単元展開期②は、作品の続きを書き、発表会の準備をする活動です。子供たちは、ここまで「かわさきさん

のかわりに」という設定で学習してきましたが、低学年の子供が長い時間に渡って学習意欲を持続させることは困難です。そこで、改めて「3年生に発表会を開く」というゴールを思い起こす活動を取り入れました。単元開始期①で3年生に発表会に参加してくれるかというお願いをし、この単元展開期②では「3年生から手紙が届く」という相手意識が高まる支援を設定しました。3年生からの発表会に対する期待や励ましの言葉は、子供たちにゴールまでの距離が近くなったことを意識させ、意欲を再燃させるきっかけとなりました。さらに、この時期に書写の時間で3年生へ発表会の招待状を書き、自分の書いた物語の工夫したところなどを伝えることで、発表会当日まで意欲を持続して取り組むことができました。

単元展開期①で身に付けた力を発揮するとともに、「文章の内容と自分の経験とを関係付けて、自分の思いや考えをまとめる力」や「楽しみながら物語の読み聞かせを聞いたり、物語を演じたりする力」などの資質・能力も育むことができました。学びの文脈をしっかりと構築することで、単元開始期で高まった意欲を持続させながら単元を見通して学び続け、資質・能力を身に付けていく子供の姿を見ることができました。

単元計画

単元の開始期に子供たちと話し合い、子供達の考えも取り込んで掲示する。学習の進行状況や・次の時間に向けて・学習のゴールへの見通しがもてるよう、掲示する。

わにのおじいさんのたからもの

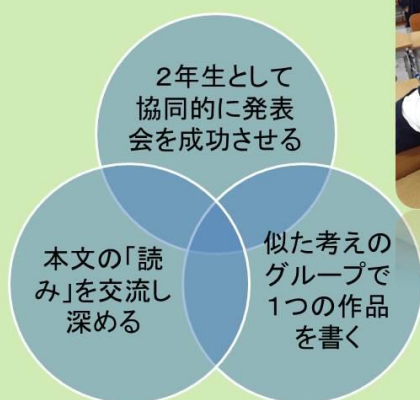
今回は、この単元を図工の「つくってあそぼうおはなしすごろく」とのコラボを予定していたため、子供がすごろく作りのイメージをもてるよう、すごろく風にデザインした。

子供たちと作成した学習計画

視点2：必要感のある協同的な学び

学びの文脈のところでも述べましたが、「物語の続きを書いて発表会を行う」という、友達と一緒に創りあげる「ゴールとしての学習活動」を位置付けることは、友達と協力して学習を進める必要があるため、初めから協同的な学び抜きには考えられない学習となります。アクティブ・ラーニングにおける国語科の学習では、この協同的な学びとセットになった「学びのゴールとなる学習活動」はきわめて有効です。

視点2 必要感のある協同的な学び



本実践における「必要感のある協同的な学び」のイメージ

国語科の最も基本的な目標である国語による表現と理解力とを育成するとともに、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら言葉で「伝え合う力」を高めることが学習指導要領に位置付けられています。

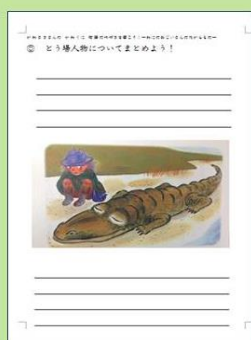
子供たちは、物語の続きの舞台となる「場所の絵カード」や「登場人物の絵カード」を選び、自分の考える続き方の立場をはっきりさせながら、続き方のイメージをふくらませます。その過程で、より具体的なイメージをもつために、同じ絵カードを選んだ友達と交流し、大筋の流れとして本当に自分と同じ考えか、違う内容なのか、違う絵カードを選んだ場合

は本当に自分と違う考えなのか、実は共通点があるのではないかと確かめる活動を行いました。自分の考えを友達に話したり、友達の質問に答えたりすることで、自分の考えが明確になり、物語の続きを書き始める自信を深めていく姿がみられました。また、続き方を考えた根拠として物語のどの部分が基になるのか示すことで、「かわさきさん」らしさがあるという説得力が増すことを実感していきました。さらに、似た考えのグループで1つの作品を書いていく学習では、さらに1つ1つの言葉にこだわって、グループで文章を書き進めていきました。より「かわさきさん」らしく、そして自分たちの願いも反映したエンディングにという思いも自然と生まれ、話合いも活発となりました。

単元の第3次では、発表会を開き、3年生から「かわさきさんらしさ」の検証をしてもらい、自分の学びを振り返る活動を位置付けました。子供たちは発表をするための準備として、自分たちの書いた物語の続きを音読し、音読しての違和感や文字を目ではなく音声として耳から聞いたことによる印象から、さらに続きを書き直していきました。発表会中には、その場で自分たちが振り返るために3年生にコメントを書いてもらい、発表会後にコメントカードを整理しながら読み、自分たちの作品の出来についてまとめる活動を行いました。これにより、新たな話合いの場が必要となり、より協同的に学んでいくことで、国語科にとって大切な論理的な思考力や想像力が養われていくことにつながりました。

視点3：目的に応じた弾力的な振り返り

視点3 目的に応じた弾力的な振り返り



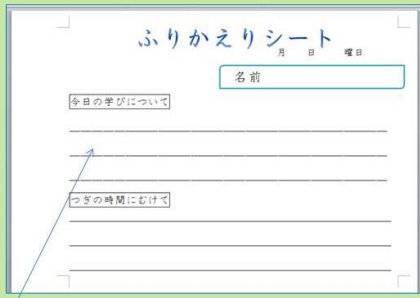
- ワークシートを活用して交流や相互評価
- ワークシートの記述から、子供のつまづきや次への課題を把握する。
- かわさきさんのかわりに続きを書くという設定からいつでも振り返る。
- 明確に相手を3年生と決めることで、客観的な視線を意識して振り返る。

本実践における「目的に応じた弾力的な振り返り」のイメージ

学習者として初期段階にある低学年の子供が適切な振り返りを行い、学習効果を高めることは難しいです。そこで、教師は、振り返りに対する意欲を高め、適切な振り返りを行うことができるよう、支援していく必要があります。

子供が学習を振り返り、次の学習に生かしたり、いつでも、これまでの学びを振り返ったりすることができるように、ファイリ

振り返りシートについて



学習の終わりに
 ・今日の学びについて
 ・つぎの時間にむけて
 の2点の内容で記入します。

書いた内容について発表する子供がいたり、その発表内容を参考に書いたりする子供もいます。

次時の最初に教師のコメント入りのものを配付し、子供がファイリングすることで前時の自分の学びについて振り返ったり、本時について考えたりすることをねらいとしています。

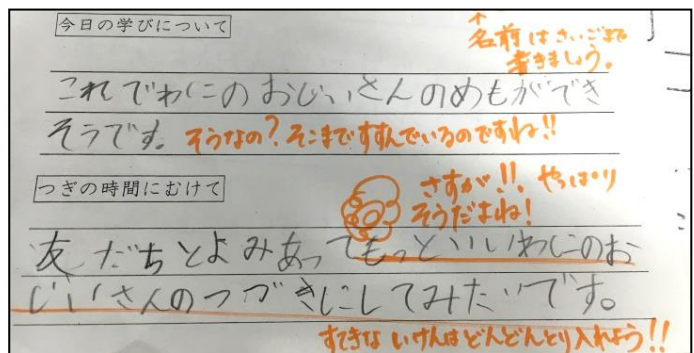
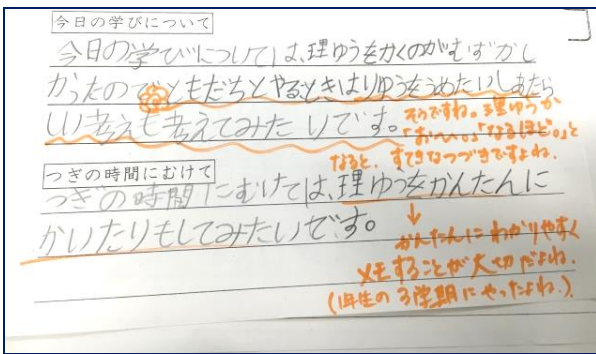
- ・自分がめあてに対してどうであったのか。
- ・わかったことやできるようになったこと。
- ・できなかったことうれしかったこと。
- ・すてきな友だちのすがた 等

効果的な振り返りのためのワークシートについて

ングできるタイプのワークシートを活用し、子供が学んだことや次の課題を考慮することができるようにします。ワークシートの記述から、子供のつまずきや次への課題を把握し、ワークシートに教師のコメントを記入し、学習の際に参考にしたり、自信を深めたりすることができるようにしました。友達の考えのよいところを取り入れたり、交流後に考えが変わったりしたところがわかるよう、加筆する際には色を変えて記入するようにし、自己の学びを客観的に振り返ることができるようにしました。更に1時間の終わりには「今日の学びにつ

いて」「つぎの時間にむけて」の2点の内容で記入するシートを使いました。書いた内容について発表する子供がいたり、その発表内容を参考に書いたりする子供もいます。次時の最初に教師のコメント入りのものを配付し、子供がファイリングすることで前時の自分の学びについて振り返ったり、本時について考えたりすることをねらいとしています。

教師は、低学年の子供が、自分の学びを確実に振り返ることができるように、視点を明確にしたり、子供の振り返りの例を提示したり、称賛したりします。毎時間、教師がコメントを書くということが必要にはなりますが、繰り返していくことで、低学年の子供に振り返りの習慣が付き、効果的に意欲的に学んでいく様子が見られました。



実際の振り返りシートによる振り返りの様子

授業者からのコメント

アクティブ・ラーニングを支える教科等間のつながりを捉えた学習

これからの時代に求められる資質・能力を育むためには、各教科等の学習とともに、教科横断的な視点で学習を成り立たせていくことが課題となります。教科等間のつながりを捉えた学習を進める観点から、教科等間の内容事項について、相互の関連付けや横断を図る手立てや体制を整える必要があります。今回の単元では、毎日行われている読書タイムと書写、図工の時間を関連付ける計画を立てました。

読みを深めるために

読書タイム

昼休み終了後から5時間目開始までの10分間。(全校的に)

通常時は自分が選んだ本を読んだり、定期的に読み聞かせボランティア(保護者)による活動があったりする。



本単元期間中

「わにのおじいさんのたからもの」学習中に出てきた、みんなで考えたい言葉や文で読書会

- テーマを3つ提示。自分が考えたいテーマで基本的に2~4人のグループを作り、話し合ってメモをつくる。掲示したり、次回に全体で確認

教科等相互の関連付けのイメージ(読書タイム)

国語は同じ教材文が数十年続けて教科書に掲載されていることがたびたびあります。そのような教材文ほど教師はより深く読み取らせなければならないのではという思いにかられることもあります。

資質・能力を身に付けることを重視してはいますが、どうしても子供の実態から作品の雰囲気をはっきりと味わわせたり、特徴となる言葉のおもしろさを実感させたりするためには、国語の時間だけでは足りない場合もあります。そこで、教

科等間のつながりを意識した学習活動を計画することで、それぞれの学習をより効果的に進めることができます。その際には「国語のために」と考えるのではなく、「それぞれの学習のために」と並列に考え、それぞれの指導事項をおさえて計画を立てることが必要だと考えます。

他教科との関わり

図工科: つくってあそぼう おはなしすごろく



国語で学習した場面の中心となるできごと、おにの子の行動と気持ちを枠の中に入れて、図工の時間にすごろくを作って遊ぶ学習を行った。



教科等相互の関連付けのイメージ(図工科)

協同的な学びを取り入れるには時間を必要とすることもあります。しかし、国語は、伝え合う力を育てることを大切にしている教科です。仲間と協同的に学ぶことは伝え合う力が不可欠であり、その経験が豊かになれば、伝え合う能力も必然的に高まっていきます。今回の実践では複数の他教科の学習と関連を図ることにより、時間にゆとりをもって、意欲的に子供たちが学習に向かい、自然と主体的に学んでいく様子が見られました。